

# 善教寺宝物

## 布岳「皇城二重橋図」

解 読 木 許 博

(会員佐伯市木立)

御衣餘光

甲寅新年恭書 法臣布岳八十有一 (落款)

皇城二重橋図 臣布岳敬写 (印)

王氣東來紫 王者の生まれるめでたい兆しが見えて

皇城聳碧霄 宮城が青空にそびえる

恍看彦郎影 男性の姿を目にとめた

拝立二重橋 二重橋に立ち宮城を拝んでいる

図成慨然書感 (落款)

御衣何皎々 天子の着物はまことに清らか

餘馥賜遺恩 残る香氣に御高恩をいたたく

曾護玉膚襦 以前は天子の肌を守った衣に

猶思聖汗存 尊い汗をなお感じる

天威齡咫尺

下拜忘卑尊

五大州皇國

三千年帝孫

滿韓新版籍

教育高溯源

忠孝習為性

君民情更溫

文明漸移氣

霸政各無痕

想起菅公淚

漱成日本魂

天顔をまじかに拝して

我が身の卑しさに恐れ入る

世界の内でも我が皇國は

三千年來の天位を保ち

滿州韓國を新たにとり入れ

教育の源は高遠で

忠孝の精神は自然に身に備わり

君民ともに情は豊か

文明は次第に興隆して

武力による政治のあとも無い

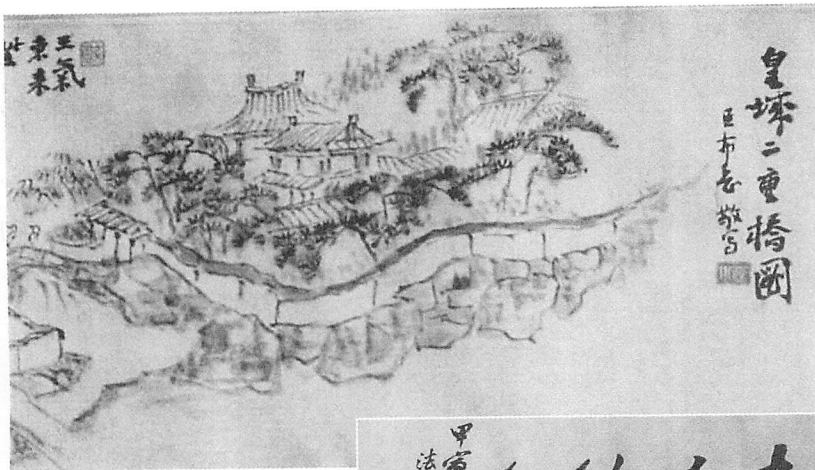
菅原道真公の流した涙は

日本魂として固まった

明治天皇御衣毎日新調。賜其旧于侍臣。従二位長谷信成卿。曾数为侍従拜其賜。客冬愛孫従子來而、為我寺養女以恩賜一領見惠贈。感喜何限恭賦五言八句為記念。

(印)

【訳】明治天皇はお召しの着物を毎日新調し、旧いものはお仕えの臣下に下さった。長谷信成卿は何度も侍従の役になり戴いていた。昨年の冬、子孫にあたる姪が来て、我が善教寺の養女となって恩賜の



着物を寄贈してくれた。喜び感動限りなくつつしんで詩に詠んで記念とする次第である。

案上鎌湘祭有光 机の上にある硯は輝き光る

乃翁墨妙亦勤王 そなたの翁は筆が達者で

又帝をあがめた

先皇遺詠百千首 先帝の遺した詩文は幾百千におよび

写向春風筆々香 いまめでたい数々の筆跡を写しとる

長谷卿老健任先帝、遺詠論集長乎、所贈写此十萬餘首

云、恭賦一旌奉呈（印）

【訳】長谷卿は老健にして先帝に仕え、その遺された詩文十万余首を写したという。おそれつつしんで私も一つの詩文をさし上げる次第である。

甲寅新年第一夜、夢寶月上人坐于香光室。

欣笑曰、籬菊吐香小園生光、我室香光莊嚴也。

第二夜、光瑞上人授余一茎禾曰、稻葉新穎中朶豊年、是國家之瑞穂也。

十五日、藤子分娩第三男誕焉、法導請命名。顧兩夢赦吉

宣命、香瑞。我高倉学寮香醉・香月・香樹・香山及香頂  
香々相続、莊嚴真宗可謂國家之瑞也。

況乎、御衣餘香誌命名説 瑞中之瑞有若芬芳乎。

記以望香瑞之大成矣云爾。

八十一翁布岳（落款）

【訳】大正三年新年の第一夜、夢に宝月上人が現れ、

部屋が香り輝いている。よろこび笑つていう。

「かきねの菊が香り高く咲いて、私の居る部屋  
も香り輝いて、にぎやかで有難さもいっぱい。」

第二夜、光瑞上人がひとつの草木の茎を私にくれ  
ていう。「稲ののぎの middle は豊かな稔りで、  
これは国家全体のめでたい稔りだ。」

これは国家全体のめでたい稔りだ。」

十五日、藤子出産して第三男が誕生した。法導

（布岳長男）に名をつけるよういわれて、いま述

べた二つのめでたい話を吉として香瑞と名づけ

た。わが高倉学寮の香醉・香月・香樹・香山およ

び香頂も香というめでたい字がついている。おご

そかで尊い真宗の教えはそのまま国家全体のめで

たさであらう。

ましてや、「御衣餘香」の「香」を名に用いるよ  
ろこばしきは、瑞の最高でみごとな香りといえる

ではないか。

このように記して香瑞の大成を希望するのだ。

以上の通りである。 八十一翁布岳（落款）

祝言（印）

天皇陛下萬歳

新年家庭念佛為本 桑門萬歳

新年胎教念佛為本 藤子萬歳

新年学問念佛為本 憲吾萬歳 大兼萬歳

香瑞萬歳 老僧記了（印）

【参考】「御衣餘香」の出典

九月十日 菅原道真（八四五〜九〇三）

・宇多天皇に仕え醍醐天皇を補佐した。

・太宰府に左遷された。同地で歿。

去年今夜侍清涼 秋思詩篇独断腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香

思えば去年の今夜（昌泰三年）清涼殿での勅題「秋

思」では自分の詩は悲しみに満ちたものであった。

いま筑紫の地で恩賜の御衣は毎日捧げ持つて移り香  
を押し奉つております。